

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 須藤 瑞代

須藤瑞代氏の学位請求論文「近代中国の「女権」概念 人権とジェンダー」は、中国が近代国家の形成に向けて大きく変容してゆく清末期から中華民国初期の時代を対象に、「女権」概念の変遷とその社会的文化的な意味づけのありようを、人権思想との関わりの中で分析しようと試みたものである。従来から、近代中国の女性解放運動をめぐるのは、資料や作品をもとにその具体的プロセスをたどる歴史・文学的アプローチと、アジア的価値と「人権」の相克を通じて中国近代の質を問おうとする社会科学的アプローチが併存してきた。本論文はこの二つのアプローチに橋をかけることを試み、そこから中国近代、ひいては東アジアの近代が生み出してきた多義的で豊かな意味をくみとろうとしている。副題にも示されるとおり、中国を対象とした「ジェンダー」と「人権」という二つの視座の結合に、本論文の最大の特長があると言っていいだろう。

論文は、序論と本論五章、および結論からなり、付録として日本と中国の辞書に見られる「人権・民権・女権」の概念変遷を整理した図表二種を収める。本文は 160 ページで、図表、参考文献一覧を含めると、総ページ数は 177 ページ、400 字詰め原稿用紙に換算して、約 630 枚の分量になる。

以下、章をおって本論文の内容を紹介する。まず、序論では、近代中国の「女権」概念を考察するに際して、「民権」「人権」との連関の重要性が指摘され、ジェンダーによる歴史像の再構築という課題を、一国史研究のみならず、国際関係の文脈に据えて研究する必要性が提起される。

続いて第一、二章では、近代中国の啓蒙思想家であり、また先駆的女性解放論者としても知られる梁啓超の思想を検討し、さらにそれを、康有為・鄒容ら同時代の他の思想家と比較考量しつつ、近代中国の女権論の特徴を抽出する。ここから浮かび上がってくるのは、「国民の母」という理想的女性像であり、女性解放が国家の富強と一体不可分のものと認識されていたという、ジェンダーとナショナリズムの強い結びつきである。

この特徴は、第三章で論じられる女性自身による「女権」主張においても変

わらない。ただ、国家の近代化や社会・文化の大きな変容にともない、論者の理想的女性像には分岐が生じてくる。それを著者は、「国民の母」に加えて、「男性化」「性役割からの脱却」「国家の否定」の四つの類型に分類整理し、以後展開するフェミニズムの多様なパターンが、すべてここに胚胎していたと述べる。

第四章では、第一章で取り上げた梁啓超の女性論を、娘梁思順との対比の下に描き出し、晩年に彼が「女権」を積極的に論じるに至る背景を考察する。最後の第五章では、中国近代の女性解放思想の総体を、国際関係の中において位置づけるべく、代表的女性誌『婦女雑誌』における日本の女性運動に対する紹介、さらには外国のフェミニズムへの認識や日本との直接交流の歴史を、興味深いエピソードを交えつつあとづけてゆく。

以上論じ来たった上で、著者は「結論」部で、国家主導の枠組みの中で「女権」が常に議論されてきたこと、言い換えればジェンダーが一貫して「国家化」されてきたことを指摘する。さらに、良妻賢母や「国民の母」、「男性化」した女性といった、女権論者が掲げた理想的女性像は、いずれも「西洋」諸国の「文明」や富強の起源と捉えられたものであったが、実は「西洋」「文明」の内部にも、そもそも国家体制と人権思想の間に緊張関係や矛盾が存在していたことに、著者は目を向ける。この点、近代中国の女性解放の思想と実践の歴史は、西洋/非西洋の区分には還元できない広がりや問題性をはらむものであったという指摘で、本論文は締めくくられる。

審査委員会では、当時の新聞雑誌など一次資料を丹念に渉猟しつつ、清末から民国期にかけての「女権」論の多様な側面を浮き彫りにしたこと、またそれらを理想的女性像という視点から、整合的ないくつかのパターンに分類整理したこと、さらに一国史を超えるジェンダー研究の可能性を示したことなどの点で、本論文に対する高い評価が述べられた。

だが、以下のような短所も複数の審査委員から提起された。すなわち、資料の読解や翻訳に未熟な点が散見されること、ことばとしての「女権」に囚われるあまり、「女権」思想の内実についての分析が不十分なこと、女性解放論の四パターンがその後いかなる変化発展を遂げたのかを考察する章を欠いていることなどである。さらに、各章の有機的関連についての説明も十分とはいえず、編別構成や論述の方法にもっと工夫があってしかるべきだったとの注文も出された。総じて、本論文は先駆的な着眼点と意欲的な問題提起を含むだけに、個々の論点について今後の課題とせざるを得ない箇所があるのは避けがたい。この

ことは何より、著者自身の自覚するところである。

しかしながら、以上述べたような短所は、本論文の学術的な価値を損なうものではない。従来断片的に論じられてきた近代中国の「女権」論を一貫した視座の下にまとめ上げた著者の力量は高く評価されるべきであるし、実際、本論文は中国近現代史・地域研究・ジェンダー論・国際関係論など複数の領域を横断する斬新な研究の方向性を示した点、学术界に大きな貢献を果たしたものといえる。さらに、本論文の主人公の一人・梁啓超の研究史上の空白を埋めた点も、本論文のもたらした大きな貢献である。

以上の理由から、本審査委員会は一致して博士（学術）の学位を授与するのにふさわしい論文と認定した。